

戦前のシンガポールにおける日本語学校について

A study of Japanese School in Prewar Singapore

柴田 幹夫*

(shibata@isc.niigata-u.ac.jp)

This article is a preliminary attempt for introducing the situation of Japanese language school in Singapore before the World War Two. Singapore was controlled by Japanese military authority and included the so-called Great East Asia Co-Prosperity Sphere. Japan launched the education oriented to make Japanese as the common language in then Singapore. There were Hongwanji Japanese language school and Shonan Japanese language school and both of them had many students. The Japanese education in these schools was implemented for training the persons who were suitable for Japan.

はじめに

私は先に「シンガポール本願寺と日本語学校」(1)という論考を書き上げたが、その中で提示できなかったものが少なくない。とくに本願寺以外の日本語学校についての紹介及び考察が全くと言っていいほどできなかった。したがって本稿では、本願寺以外の日本語学校について歴史的に考察を加えたい。海外における日本語教育は、つねに諸刃の剣である。海外植民地における日本語教育はややもすれば日本中心主義、日本語注入教育になってしまっている。日本本国と同じ言語、言い換えれば共通語として日本語を学ばなければならないのである。そこには他国の文化の尊重などは全くと言っていいほどない。植民地政策の一環として日本語教育も位置づけられている。

本稿では、日本の軍政下にあったシンガポールにおける日本語学校や、日本語教育の実態について考えていきたい。

シンガポールにおける日本語教育は、その多くが「大東亜共栄圏」「軍政下」「皇民化教育」というキーワードの中で考えられてきた。もちろんそれらは海外における日本語教育そのものが日本の政策のもとに行われたからにはほかならない。ただ教育という営みは人と人との関係で成り立っている。この関係を抜きにただ政策だけを取り上げて日本語教育を考えるとするのは、必ずしも適当であるとは思えない。日本語教育の目標、到達点がどのようなものであるかははっきりしないが、学び手の思いと言うことも考える必要があるだろう。

* 新潟大学国際センター 助教授

1 シンガポールにおける日本語教育

(1) 軍政下における日本語教育

1942(昭和17)年2月15日「マレー方面帝國陸軍部隊は本十五日午後七時五十分シンガポール島要塞の敵軍をして無條件降伏せしめたり」(2)と大本営発表に日本は朝野を挙げて喜びに酔っていた。「シンガポールは遂に陥落した。イギリスの東亞侵略據點として永久不落要塞を誇ったシンガポールも盡忠報國、精銳無比のわが皇軍の前には遂に屈服せざるを得なかったのである。大東亞戦争勃發以来今日までハワイ、香港、マニラと相次で赫々たる大戦果を収め、いまシンガポールの陥落によって世界の歴史は茲に新しき段階に巨大なる第一歩を踏み出したのである……」(3)と新聞紙上で伝えているが、このことはとりもなおさず、「シンガポールに凱歌あがる、一億の決意愈よ堅し、進め貫け米英に最後のとどめ刺すまでは」(4)(翼賛会制定標語)と言われたように、米英の暴虐からシンガポールを守り、東亜の平和秩序を回復させる役目を我が日本が負い、大東亞共栄圏を作るという論理を作り出した。そのために「皇軍」「御稜威」といった神がかり的精神性、あるいは「八紘一字」といったようなアジア主義的平和論を全面に押し出してきたのである。

1941(昭和16)年1月に国語対策協議会が「日本語を共栄圏語に」というスローガンのもとに文部省で開かれた。これによると「進む新東亞建設に日本語を共栄圏語たらしめるため日本語普及国語対策協議会では朝鮮、台灣、關東州、南洋、滿洲、北、中、南支及び蒙古の各地に於て教科書編纂や日本語教育普及にたづさはれている教育關係者を招き内地側からも企畫院、對滿事務局、情報局、興亞院、外務省、陸海軍部、大政翼賛会、文部省の關係官、それに國語學者教育實際家を併せ來たる二十日から四日間文部省内で開催し、日本語普及の根本方針と實情に基づいて正しい日本語教育の指導統制を協議することになった。なほこの協議会に先行し文部省ではかねて編纂印刷中の初歩用日本語讀本「ハナシコトバ」上中下三冊を三月末には刊行配布する一方今回の協議における外地教育者の意見に徴して今後「日本語教本」及び「文化讀本」の讀刊を計畫してゐる。日本語教本は「ハナシコトバ」が一般向會話用なのに對し正規の日本語教育を目的とする小、中學校用でありその第一、二巻は既に原案が出来てゐる。また文化讀本は外地の大衆層に呼びかけて日本の歴史地理を紹介する五、六十頁の小冊として廣く共栄圏内に配布し日本文化の普及振興に努めることになってゐる」(5)とあり、日本語教本及び日本についての歴史や文化などを教える教材が策定されつつあることがわかる。

さらに1942(昭和17)年2月に「大東亞建設審議會」が政府内に設置されるが、この審議會における議論(1942(昭和17)年5月21日 内閣總理大臣官舎 午後2時10分開議)を少し見てみよう。第二部会(文教政策)の部会長であった文部大臣橋田邦彦が第二部会における審議の経過を報告するが、その中に「大東亞建設ノ精神的基礎ハ日本世界觀デアリマス。從來大東亞各地ニ勢力ヲ持ツテ居リマシタ米英的世界觀ヲ根柢トスル大東亞文化ヲ樹立シナケレバナラナイデアリマスガ、我ガ國ニ於テモ從來諸々ノ學問ハ外來文化ノ輸入ヲ必要トシマシタ結果、必ズシモ日本世界觀ニ基イテ居ツタトハ言ヘナイデアリマス。歐米思想ヲ

其ノ根柢ニ持ツ如キモノモ少クナカッタノデアリマス。其ノ爲國民ノ中ニハ往々我が國本來ノ姿ヲ見失ヒ、思想ノ動搖ヲ來シタモノモ少クナカッタノデアリマスルガ、今日大東亞建設遂行ニ當リマシテハ、斯カル事態ハ斷乎トシテ是正スベキデアリマシテ……從來流通シテ居リマスル歐米語ハ成ルベク速カニ之ヲ廢シ、大東亞ノ共通語トシテノ日本語ノ普及ヲ圖ルト云フ根本ノ點ニ付テハ御意見ノ一致ヲ見タノデアリマス……」(6)と述べ、日本中心主義・日本語中心主義を鮮明に現している。となれば大東亞共栄圏に属するいわゆる占領地における教育は、日本語を第一言語にして行われることは疑いがない。本願寺の前法主大谷光瑞(7)も「大東亞建設審議会」委員であった。彼は橋田の説明に対して「此ノ歐米語ハ成ルベク止メサセルト云フコトハ、私共第三部會デモ申シテ居ル、大賛成デアル、サウシナケレバナリマセヌガ、文字ト云フ點ニ付テ何モ言及シテゴザイマセヌガ、文字ハドウ爲サイマスカ、日本ノ假名ヲ以テ御ヤリニナラレルノデゴザイマスカ、或ハ又羅馬字ヲ併用する御積リデゴザイマスカ……」(8)と質問をしている。この質問に答えて橋田は「文字ニ付キマシテハ只今御話ニ通り色々考究スベキ問題ガアラウト存ジマスガ、根本ノ方針ト致シマシテハ、我國ノ假名ヲ使用セシムルト云フコトヲ一般的ノ方針ト致シテ居ルノデアリマス……」(9)と答えている。さらに大谷光瑞の所属する第三部会(部会長小泉親彦厚生大臣)では、「而シテ領土タルベク地域ニアル多民族ニ對シマシテハ、今ヨリ直チニ之ヲ日本化スルノ方策ヲ大イニ講ズルノ必要アルベク、是ガ爲ニ速カニ日本語ノ普及ヲ徹底スルコトガ極メテ肝要ナリトノ意見ガ、殆ド各委員ヨリ有力ニ開陳セラレテ、一致シタ御意見デアツタノデアルマス……」(10)と報告している。これによって日本の大東亞共栄圏内における日本語教育の重要性が確かめられたのである。具体的な作業は文部省を中心として策定されるが、『中外日報』1942年8月20日号の記事によると「大東亞戦争の進展に伴い、わが南方建設は大東亞共栄圏の確立を目ざし、着々その巨歩を進めつつあるが、南方建設に際し、現下もっとも緊要なことは南方諸地域に土着する各民族に對し、日本語を如何にして普及徹底せしめるかにあるが、文部省においては、これら各民族に對する日本語の教育並びに普及の方法に關し、研究中のところ成果を得たので十八日の定例閣議において南方諸地域日本語教育普及に關する件を附議、橋田文相より説明あつて次の如くその取扱い方を決定した。

一、日本語教育並びに日本語普及に關する諸方策は陸海軍の要求に基づき文部省においてこれを企畫立案すること、このため陸海兩軍、企畫院、文部、拓務、外務、情報局、興亞院の關係官による日本語普及協議會(假稱)を文部省に設置し右方策に關する諸種の具體的事項を審議すること。

二、南方諸地域の諸學校において日本語教育のため使用する教科用圖書は陸海軍の要求に基づき文部省においてこれを編纂發行すること、南方諸地域に派遣せらるる日本語教育要員(教員)は陸海軍の要求に基づき文部省においてこれを養成すること。南方諸地域に對する日本語教育並びに普及に關する諸方策は陸海軍の要求に基づき文部省においてこれを企畫立案することと決定したが、右に關する文部当局の意向は次の如くである。

一、教科書は各地域別に全部日本語という直接法で編纂、先ず成人向き、ついで初等科から中等科におよぼし、特に掛図などを要視する、同時に簡易な會話書及び辞書をタガログ、マ

レー、ビルマ、安南、泰の五種で編纂する。

二、教育要員の養成は、内地で行うか、現地か、また専門学校を作るか、一般学校の一学科とするか、または社会教育施設によるかなど研究の余地は大きい。がさしあたり本年度内の要員五百名は中等学校卒業程度を資格とする期間三ヶ月の講習會を來る十月ごろから二回東京で開催する。しかして右諸工作にあたっては時局下寧ろ拙速主義で寛大に行ふ方針であるが、すでに支那大陸で経験ずみのことで當局は成功の自信をもってゐる」(11)とあり、かなり具体的な方案が作られていたことがわかる。

では実際に現地ではどのような方策をもって日本語教育が推進されたのであろうか。渡辺渡少将馬來軍政部部長の関係史資料によると日本語の簡略化問題を以下のように断罪し自信をもって日本語教育に携わるべきであるとした。「南域ニ對スル日本語普及ノ角度ヨリ内地ニ於テ採リアゲラレツツアルモ一顧ノ價值ナシ、日本語ガ南方民族ノ鼻息ヲ窺フ如キ態度ヲトル必要ナシ、可能ナル程度ニ於テ逐次普及向上セシムベク日本語及ビ文字ヲ改変（ローマ字綴等）ヲ加フベカラス。内地ヨリノ新任者ニ特ニ注意ヲ與フルノ要アリ。軍ガ僅カ数十日間ヲ以テ世界ノ歴史ヲ改變スル大事業ヲ發揮シタル時文字ニ携ル人間ガ卑屈ナル態度ヲトリ日本語ヲシテ新付ノ民ノ鼻息ヲ窺フガ如キ感アルハ排スヘキナリ」(12)という。このことは南洋の人にわかりやすく説明するためにローマ字などを使わずに直接日本語を教えるということであろうか。さらに続けて「日本語ノ試験ヲ官吏登用制度中ニ加味スヘシ、日本語ノ普及ノ意慾ハ之ヲ官吏ニナルタメ日本人ト交際シタキタメ一依ラシムル様日本人ノ態度ヲ持シ特ニ日本人ガ英語ニヨリテ現地人ト語ル如キハ避クヘシ」(13)といい、現地の人々は官吏になりたいために日本語を学ぶものだという認識で、日本人らしく振る舞うように求めている。

大東亜共栄圏内の共通語として日本語の使用が強制されることになるのだが、その中核なるのは「皇民化教育」そのものであった。使われる日本語教科書には「大東亜の盟主」としての日本を姿が顕著に表れている。たとえば「天皇」「君が代」「日の丸」のような題材、「兵隊」「軍人」賛美のような軍国主義的内容、「礼儀」や「規律」、「勤勉」「友情」「家族愛」などといった日本的価値観に関する教材が使われた(14)。

(2) 日本語普及運動

本願寺日本語学校や昭南日本語学校などで行われていた日本語普及運動については、シンガポール軍政部の綿密な計画のもとに行われたものである。『渡辺渡少将軍政関係史資料』によれば、日本語教育を含め宣伝に力を傾注させていた。日本語教育の普及奨励については以下のように規定されていた。「日本語教育普及、奨励 既存社会施設ヲ利用シ或ハ「ラジオ」、新聞、映畫、音樂、紙芝居等ニ依ル日本文化ノ紹介、日本精神、日本語ノ普及等ハ初期ニ於テハ宣傳班之ヲ實施シ以テ民心把握竝土民ノ啓蒙ニ全力ヲ傾倒セルトコロナルガ、特ニ文教科ハ宣傳班ヨリ國語學校ヲ繼承シ日語ノ普及ヲ圖リ、又日本語檢定制度ヲ設ケ之ガ能力章ノ佩用ヲ企圖シ、或ハ現地人青少年男女ノ日本語演説會等ヲ開催シ、民衆教化ヲ實施中ナリ。又各州ハ之ニ呼應シテ州政廳ノ日本語官吏自ラ教師トナリ日本語講習所ヲ開キ、各地ノ

日本語熱ハ甚ダ旺シナルモノアリ。マタ各都市ニ於テハ私立ノ日本語講習所新設セルモノ多シ。(尚之ガ爲巷ニ氾濫セル各種日本語自習書ハ約二七種ヲ數ヘリ)

宣伝については「…「シンガポール」陥落スルニ及ビ宣傳基地ヲ昭南島ニ…置キ………攻略後ノ初期ニ於テハ占領地區ニ對シ專ラ英米蘭依存觀念ヲ拂拭シ日本ノ企圖スル戦争完遂ト南方建設ニ協力セシムヘキコトヲ根本觀念トシ軍政ニ對スル恪遵協力ノ念ヲ徹底扶植シ依ツテ軍政遂行ニ資シ、對内地宣傳ハ主トシテ占領地内ニ於ケル建設状態竝南方ニ對スル正シキ認識ヲ得サシムル……… (一) 占領地ニ對スル宣傳ハ「シンガポール」占領ガ適性國家群ニ與ヘタル脅威ト無敵皇軍ノ武威徹底及占領地ハ日本領土ニシテ住民ハ日本臣民タルノ歸屬ヲ明カニシ、皇恩ノ下、進ンデ大東亞建設ニ挺身セシムル如ク指導シ………」とあり、具体的には「四月以來占領地住民ノ日本語學習氣運ニ即應シ日本語普及運動ヲ展開シ市内日本語書籍ノ調査を行ヒ又昭南日本語學園(十一月文教科ニ移管シ軍政監部國語學校と改稱及昭南兒童學園(十一月閉止ヲ開設シ小學校教師ニ對シ日語ノ講習ヲ開始ス、六月子供新聞「サクラ」ハ假名文字ニテ印刷シ現地新聞、「ラジオ」ニ日語講座ヲ實施シ映畫、音樂、娛樂場、街頭等隨所ニ日語ニ依ル「ポスター」寫眞等ヲ掲示シテ之ガ普及ニ努メタリ。日語普及宣傳用ノ印刷物ノ主ナルモノハ日本語發音手引、天子様ノ軍隊日常會話、日本ヲ信賴セヨ、日本語強調會話、大東亞決戦ノ歌、愛國行進曲等ナリ」(15)とある。この方針に沿って各種の日本語学校において日本語普及運動が展開されたのである。

2 シンガポールにおける日本語学校

(1) 本願寺の日本語学校

本願寺とシンガポールを含む南洋とのつながりは非常に早く、すでに1898(明治31)年には、巡教使土岐寂靜・朝倉明宣の両師が本願寺の命を受けて、南洋に宗教視察のため訪れている(16)。もちろんこの事は来るべき海外開教に備えてのことであった。

海外開教を積極的に推し進めたのは、本願寺の宗主であった大谷光尊(1850~1903)である。本願寺21世大谷光尊(明如上人)は、きわめて進歩的な考えの持ち主で、明治初期の廃佛運動に抗するとともに、宗門内の新進僧侶をヨーロッパやアメリカ、アジア各地に派遣したり、また本山運営に議会制度を取り入れるなど、宗門の近代化に努めた人物であった。光尊は、日清戦争後に海外開教の機運が出てきたので、嗣法鏡如(大谷光瑞)とともに、積極的に海外開教に出たのである。アジア開教に限って言えば、1886(明治19)年にロシア沿海州ウラジオストクに多門速明を派遣したことはじまり、1896(明治29)年にはウラジオストク・セメヨーノスカヤ街に布教所を設立するに至った(17)。北の要地にまず本願寺を作り、次に南の地に勢力を伸張し、最後に中央部すなわち中国を視野に入れて本願寺の拠点を作り出していくのである。

シンガポール本願寺に話しを戻そう。初めてシンガポールの地に派遣されたのは、佐々木千重であった。佐々木千重は福井県の生まれで、1894(明治27)年本願寺の設立に係る文学寮高等科を卒業している(18)。その後、大谷光瑞の援助によって、1896(明治29)年9月

佐々木千重が南洋渡航を企てて、翌30年より木曜島で布教を開始したが、うまく行かなかったようである(19)。1898(明治32)年8月佐々木千重はシンガポールヴェクトリア街に本願寺布教所を設立した。

シンガポールに於ける本願寺は、平素の布教や、読経などの佛教儀礼はもとより、附属教育部や、その他のさまざまな活動から成り立っていた。「余が目下の事業たる何分此大區域地に在りて、漸く一名の駐在勤務なれば、計畫通り事業をして十分に進歩せしむる能はざるも、定期説教として毎月第一日曜及十五、二十八日三回を開き、其の外機会を得れば、地方巡教として本港を隔て、三四百里内外の各都邑に出張布教を試み、已に本月も馬來半島の舊都コーランボー府日本人設立厚德會の招聘に應ぜしが、余は其當時盛大な歓迎を請けたり」といい、また教育部は「教誨の傍ら日々六時間づ、四十餘名の邦人、支那人等の男女の子弟を預かり諸種の學課中邦人には重に英學、支那人には加ふるに邦語學を以てし、妻は専ら裁縫の一課を擔任せしむ夜學研究生亦數名を存する爲め、實に晝夜忙殺さる、計にて、佛陀洪恩の萬分の一を報ぜざる可けんやと……………」(20)という仕事の内容を紹介するとともに、法務の合間を縫ってボランティアとして英語・日本語などを教えていたことがわかる。

本願寺がシンガポールに教線を張ったときには、日本佛教を弘めようとする心意気の中からマレー語での布教活動とともに、日本語を教えることによって日本佛教や日本を理解してもらうという目的があったように思える。その後、シンガポールが昭南島と名を変え、日本の軍政下に組み込まれ、昭南島の人に日本風の教育を施し、日本文化を強制的に教え込んだ。このことは南洋での支配権確立とともに皇民化教育を徹底させると言うことにほかならない。そのために日本語を徹底的に教え込むということを行ったのである。そのお先棒担ぎが、まさに本願寺に課せられた使命であった。本願寺にしてみれば、当地において日本語教育の歴史があったので、簡単に引き受けたのであろうか。「南方文化工作と軍の態度」という座談会の中で、陸軍報道部員陸軍中佐堀田吉明は、宗教問題について以下のように語っている。「今軍政施行時期に於いて、軍はどういふ考へで宗教取り扱ってゐるかと申しますと其の爲には南方の特性を能く見極めなければなりません。大體南方は文化の程度の低い原住民が多く、宗教心は旺盛であることは御存知の通りであります。随つて宗教を通じて民心を把握する、かういふ點に特に重點を注ぐ必要があります。即ち宗教を通じて南方の民心を日本軍信頼、皇國信頼といふところを取敢へず集中していくといふことが一番基礎になる。民心が離反しては何も出来ません。それにはどうしても宗教を無視するわけには行きません。この點には十分注意されまして戦の初めのあの方面に對しましては、軍に附隨する文化工作に任ずるところの報道、宣傳或は宣撫といふやうな方面に宗教家の方に出て戴いて居ります……………」(21)。まさに宗教を通じての宣撫工作を本願寺が請け負っているのである。

当時の『中外日報』や『本願寺新報』には、昭南本願寺の日本語教育を伝える記事が散見される。「馬來の地昭南島に唯一の佛教寺院として特殊の活動をしている昭南島西本願寺から最初の報告が寄せられた。同地住民のもっとも希望する日本語学校はこの4月15日からすでに開設され、1ヶ月を一期とし四期で修了する制だが、七月末現在で一三八四名の生徒が押しかけている。この日本語普及のためと最も手っ取り早く「日本」を理解さすため本願寺

が思い切って「日本の馬來」といふ劇を昭南劇場でこの日語學生二〇名を俄に動員して演じたがとても成功であったと、なほ日語學校が機縁でドンドン職業紹介などもするのでさらに學校以上の役目も果たしているといった調子であると報じている。更に「この日語校はもとより臨時のものだが將來は本格的な學校経営も考へている」(22)。その他にも「昭南島の本願寺日語塾大もて 街に漲るアイウエオ歌」という見出しで「日本になっただから日本語を勉強しよう、そして日本のお手傳いをしよう、現地住民の協力意識の現れは日本語學習運動となって全マレー、スマトラに漲つてゐる、去る一日から一週間を最初の日本語普及運動週間として軍〇〇班をはじめ關係各機關の後援を得て各地に大々的な日本語學習行事が展開されてゐる。

【その一】從軍僧川崎榮城(36才)師、岡本泰雄(32才)師が眞先に開いた西本願寺日本語塾、四月十五日開校當時の十九名が一ヶ月半の今日では六百名を突破、クアラ・ルムプール生れの助手岡本春子(22才)さんを加へた三人で晝夜に分けても到底収容しきれず毎日殺到する入塾申込者の處理に悲鳴を擧げてゐる始末だ。入塾志願者の種族は勿論年齢、階級等雜多を極め、月謝を千圓拂つてもよいから特別授業をして呉れ といふインド紳士もあれば、その日からボーイに 使ひながら教へて呉れといふ僑生もある、ところで困るのは教科書の問題だ、とりあへず川崎先生 編になるガリ版刷りの教科書で、中級組はもう立派な國民學校五、六年生になつた程である。去る一日からこの塾生の日本語芝居「ニッポンゴノシケン」が昭南劇場で行はれてゐる。強い日本の兵隊さんへの御恩返しの一端にと優しい彼等の慰問譜だ。

【その二】六月一日を期して昭南市内廿二ヶ所に横三間、縦二間といふ大ポスターがたてられて市民の度膽を奪つてゐる。これは軍〇〇班の考案になる繪と文字と発音のポスターである、各新聞も一せいに日本語欄を設け連載してゐる、歌の方では愛國行進曲が王座を占め廿七日の海軍記念日に海軍軍樂隊が作曲したアイウエオ・ソングが正しい日本語の発音を歌を通じて覚えられといふので目下盛んにうたはれてゐる」(23) という記事がある。このように本願寺は軍の後援のもとに日本語學校を開き、多くの學生を集め、盛んに日本語と日本文化を喧伝して行くのであった。

一ヶ月半で元來19名であつた日本語學習者が600名を突破したというのは驚き以外なものでもない。如何にシンガポールが日本の軍政下に入り、昭南島と名前を変えても、どうしてこれだけ多くの方が敵国日本の言葉を学ぶのであろうか。前述した大東亞共榮圏における日本の方針がその重要な事項であるといふのは言うまでもないが、政策だけでは理解できない点もあろう。一般市民の偽らざる行動様式は日本語を学ぶことによって次のビジネスチャンスが多くなり、仕事を選択する幅が広がるということも考えられるであろう。シンガポールに在住する日本人以外の人々にとっては、シンガポールは多国籍多民族集合体であるためにアイデンティティの問題を考えることは自分のルーツを探ることはあつても難しい問題である。このような状況のなかで彼らは自分たちの支配者は自分たちで決めることができないという状態が永く続いた。換言すれば従來からの支配者であるイギリスに代わつて日本が支配者になつたのである(勿論私の言は勇敢にイギリスや日本の圧政下にあつて権力と戦つた

人たちにとっては到底承服できない言葉であることは十分承知しているが、ここでは一般民衆は占領下のもとでは「食べていく」ことのほうが最大にして最高の関心事であったということである)。本願寺の日本語塾やその他の日本語学校が隆盛を極めたのはそのあたりのことが関係してくるかも知れない。ではその結果としての日本語習得はどうであったのだろうか。小島勝氏は「日本語と日本精神を徹底して鼓吹することにした。多くは二十歳代のマレー人であったが、六ヶ月間の訓練をくり返し、……徹底したスパルタ教育を実施したという……「君が代」を歌わせ、教育勅語を唱和させ、柔、剣道を教えた。また土俵を作って相撲を取らせ、日本式の田植えもやらせたという。畳の部屋も作った……しかし訓練生はこうした処遇に憎しみを抱くどころか「彼らは本当に日本のために命を捧げるというところまで精神的に成長した」という。イスラム教の信仰生活に干渉せず、現地の料理を食し、同じベッドに寝たこともあり、「現地人の中に飛び込んだ」ことが訓練生との心のつながりを確かなものとした。訓練所の共感が十人ぐらいつつ受持ち「生活」を共にする中で徹底した「心をこめたスパルタ教育」をしたという。半年で日本語会話の力がみるみる上達し、教科書のような書いたものでは追いつかないほどであった」(24)と記されているが、これは特異な例であったかも知れない。1943(昭和18)年の末になると、昭南政府の命令ですべての科目は日本語で教えられることとなり、また学生は日本の国歌やその他愛国歌曲を唱わされた同時に日本の祝日を祝い、また身体を曲げる角度(挨拶をするとき)まで教えられたのである。しかしながら、一部の学生たちは英語の勉強を秘密裏に引き続き行っていたという(25)。

(2) 昭南日本語学園

1942(昭和17)年2月24日付け読売新聞は「昭南島へ早くも文化の戦士」という見出しとともに「シンガポール占領の輝かしい戦果を據げるとともに、皇軍は早くも名も改まる昭南島の文化工作に乗出し……」(26)と言う記事がある。宣撫工作の一つとしてみる事が出来るであろう。陸軍宣伝部員であり、昭南日本語学校の校長でもあり、また詩人でもあった神保光太郎や作家、劇作家であった水木洋子などが派遣されて、日本語学校の様子を報告している。先ず神保光太郎から見ていこう。神保光太郎(1905~1990)は山形県生まれ、京都大学卒業。長く埼玉県に暮らし、県下にある多くの学校などの校歌を作詞したことで知られる。『朝日新聞』は、昭南島における日本語教育の実態を次のように記している。「昭南市の中央クインストリートの一隅に〇〇〇〇が始めた日本語の学校「昭南日本学園」がある。生徒は支那人、印度人、マレー人、亜歐人その他種々様々の人種を網羅し、第一期生、第二期生が各三百余名、市内小学教員の特別聴講生が約三百七十名、併せて千名以上の男女が朝に夕に日本語を勉強してゐる。先生は六名で園長は詩人として著名な神保光太郎氏。兵隊さんも小島部隊の園谷次男兵長が一名教壇に立ってゐる。ここに詩人校長神保光太郎氏の感想を乞うて披露する。シンガポール陥ち、新生昭南島として出発したこの町を中心とするマレー全土のこの半箇年文化建設園を考へて見るとき、何といつてももっともめだったものは日本語普及運動であったといへる。私は日本語の学校をやつてゐるため、毎日未知の市民から日

本語に関する相談を受けた。手紙も日に数通来たが、みな日本語を学ぶについての質問や、学校に入れてほしいといったものであった。先日第一期の終了式をあげ、第二期を募集したところ受付開始一時間で、千人を突破し、締め切りまでは結局募集人員の十倍となった。しかもカタカナの試験をやるとか、學歷や年齢を勘案するとかの条件を設けたのだが、この盛況であった。「まなべー日本語をー」といった簡単な標語で始められた日本語運動は、今日のところ豫想以上の成績をあげてみるとみてよかろう。はなはだしく文化的話題を飲んでいるこの土地の一般市民にとっては、あるひは日本語が流行の先端を切っているのかも知れない。黄昏時など、涼をとって集っている道傍のマレー人とか印度人、支那人の内での日本のことばを中心にして、しきりに何か論じあっている情景は珍しくない。しかしながらなぜ日本語をまなぶかといふ問題になると、流行的問題といったやうな樂觀した回答は許されないだろう。日本語熱の根源となっているものは、新しきことばへの知識欲といふよりも、生活の必要から職についてゐないものは、日本語を覚へることによって、よい職業をえようとし、また職にあるものも、日本語を熟達することによって、更によい地位にのぼらうとする必要からと思はれる。この事實は今後の日本語教育の方針を立てる上に忘れてならないことではないかと思ふ」(27)と神保は述べているが、「皇民化教育」が多くの場合喧伝されているが、もっと原始的な意味で「より条件のよいところに就職したい」ために日本語を学んだ人が多くいたのではないだろうか。

続いて水木の報告を見ていこう。水木洋子(1910~2003)は東京生まれ、府立第一高女から日本女子大に進むが卒業を目前にして文化学院に転校する。1932年文化学院を卒業する。1942年にシンガポールに陸軍によって派遣される。

水木は軍監政部の国語学校に派遣された。おそらくは上述の神保の昭南日本語学院と思われる。何故かという、軍監政部の学校で後に国民学校と改称されるからである。「昭南の街は僅か半年の間に、英語から日本語へと急速に転換しつつある。街角の広場で、コブラを踊らす印度人の蛇使いまで、あの不思議な瓢箪型の笛を吹きながら「ナガサキ、カラ、クワラルンプール マデ コノ蛇 ナガイヨ」と言いながら、色々な手品を見せている。その中にたった一人の日本人を見つけると、ますます日本語に拍車をかけて、饒舌り出すのである……。私は最初、二階の加藤貝子先生の教室へ這入った、何れも粗末な部屋であるが、入口に消毒液の洗面器があり、服装を正す爲の鏡が備へてある。きび、とした足どりで、加藤先生が登壇されると、マレー人の級長が赤い宗匠の被る様な帽子をちょこんとのせたまま「キオツケ、レイツ、チャクセキ！」と號令をかける。何れも、大きな體格で、髭をはやしたの、頭のはげたの、赤、黒の帽子をのせたマレー人、ターバンをまいた印度人、ポマードをてかてかさせた華僑の子弟、パーマネントのユーラシアン娘達、匯々雑多な各國人種の展覽會で、正に壯觀である。先生達は、絶対に、英語はつかわない(……筆者)といふ方針で、行儀の世話から一言一句迄嚙んでふくめる様に、ゆっくりと日本語をつかふ、これも却々疲れることだと思ふ。彼等は、リズムにあはせて、正確な日本語の発音を訓練され、また音律の強弱にのって、その思想を自然に吸収していくのだ。暫くして、先生は、一人の印度青年に、好きな歌を歌ひなさいと言った。彼は色は黒いが、綺麗に髪を分けた、たくましい若者である。

同じ印度人でも、比島と南方、その宗教によって、風俗が異なる。彼はもと、昭南の政治新聞記者であっただけに、近代的な服装をしてゐる。彼は立ち上がると、大きな白い眼で、私の方をふりむいて、いたづらさうに笑ったかと思ふと、胸一杯に息を吸ひ込んで、歌ひ始めた。「朝だ、夜明けだ 海の男の艦隊勤務 月月 火水 木 金金……」それは素晴らしく大きな聲だ。私は、藤原義江の歌を聴いてゐる様な錯覚を感じた。宮古先生は一心にタクトをふつてゐる。歌ふ人、教へる人……私は胸の底から熱い感動が湧き上つて、そつと瞼をとちてしまった。然し、私の瞼には、次の數字が浮かんで来て、容易に消えなかつた。九百人の中、九十點以上の優等生が二百五、六十人。各科目全部百點のもの三十人。そしてその優等生は殆ど支那人によって占められ、然も、優れて鋭敏なのは華僑の子弟であることだ。是等の數字は、まだ、澤山の問題を残してゐると思ふ。文化の建設も却々、生やさしいものではない。先刻、砂澤先生から、授業の傍ら書き上げたといふ讀本の原稿を拝見したが、尚ほ此の他にも、副讀本になる小説や、彼等の手で演じられる芝居の脚本を、内地からも是非送つて貰ひたいと切望していらつしゃつたが、全く、一人何役もを奮闘してをられる此處の先生方も、それだけに任務は重大である」(28)

と報告している。

文化人の報告以外にも新聞はシンガポールにおける日本語教育の様子を次のように伝えている。「シンガポールが陥ちてからこの十五日が半歳目にあたります。シンガポールの名前が昭南島と變つたやうに街の様子も住民の氣持ちも戦争前とは見違えるやうに變りました。いまでは日本の昭南島として、商店の看板にも日本字は増え賣子は「イラッシャイ」「アリガタウゴザイマス」などと上手に日本語を使って兵隊さん達に愛嬌をふりまいてゐます。それにも増して日本語が上手になったのは子供たちです。毎日學校で日本語を教はり日本語のトクホンを一生けんめい勉強してゐます。昭南島には人種が多いので小學校も支那人、印度人、マレー人など別々の學校に分けてありますが、どの學校も毎日二時間ぐらゐづつ日本語の授業があります。この間昭南市役所では各小學校生徒の成績表を集めて陳列會をやりましたが、習字や綴り方が實に上手にできてゐて見物の人々もびっくりしてゐました」(29)。

これらの報告や記事を見て感じることは、大東亜共栄圏にあつて日本から離れていても日本より一生懸命日本語を学んでいる人たちが多く存在していることを広く日本国民に周知させたいという軍関係者の思惑や教師たちの熱意を感じる。短期間に行われた日本語普及運動の成果を垣間見るようである。

このように官民挙げての日本語普及運動は、瞬く間に多くの日本語学習者を生み出したのである。

おわりに

シンガポールにおける日本語学校の実態を本願寺教団の手にかかる学校と、それ以外の昭南日本語学院の様子を簡単に紹介したわけであるが、不十分な感は否めない。とくに学校の様子が浮かび上がつてこないのである。資料を十分に探し得なかつたということと、先行研

究に十分目を通していなかったことが上げられよう。ただ今回の論文で、従来誰も論じなかった本願寺関係の日本語学校について言及できたことは良しとしなければならないだろう。

軍政下における日本語教育は諸刃の剣であることは、前述したとおりであるが、共通語としての日本語と日本文化を注入することは「皇民化教育」「八紘一宇」の観点から見れば当然のことであるが、そこには占領された人々の姿が浮かんでこない。ただ一般庶民レベルで考えてみると、よりよい生活を希求するのは自然なことである。日本語を学ぶことによってよりよい生活が出来る選択が増えるというのもまた事実である。私たちはこの事実をどう考えるべきであろうか。かなり重たいが今後の研究の大きな課題としたい。

[注]

- (1) 拙稿「シンガポール本願寺と日本語学校」(『環日本海研究年報』2007年3月)
- (2) 『中外日報』1942年2月17日号。因みに「シンガポール島(港)は自今昭南島(港)と呼稱することにさだめられたり」と翌日の読売新聞は大本営発表として伝えている。その意味するところは「昭和の御代に南方雄飛」という。
- (3) 『中外日報』1942年2月17日号。
- (4) 『中外日報』1942年2月17日号。
- (5) 『中外日報』1941年1月17日号。
- (6) 『大東亜建設審議会関係史料』第一巻(『南方軍政関係史料』23龍溪書舎 1995年復刻版 52頁)
- (7) 大谷光瑞(1876~1948)西本願寺22世。21世大谷光尊の長男として京都に生まれる。1886年学習院に入学するが、退学し、共立学校に学ぶ。1899年に中国に巡遊し、またインド佛跡巡拝と欧州に外遊する。帰途ロシアを経て中央アジアを探訪する。途中父の死去にともない西本願寺住職を継職する。さらに中央アジア地方に探検隊を派遣し、貴重な文物を将来した。ただこの一連の探検隊事業などで多くの費用がかかり本願寺教団の経費を出費することとなった。それが本願寺疑獄事件や負債問題を引き起こし、その責任を取って住職、法主を退いた。その後は中国や満州、南洋などを歴訪し、孫文などとも交際を深めていった。上海で機関誌『大乘』を発行するなど精力的に時局に関わった。また1940年には近衛内閣の参議となり、44年には内閣顧問などを歴任した。敗戦を大連で迎え、47年に帰国する。48年療養先の大分県別府市で亡くなる。終焉の地別府には大谷記念館や大谷探検隊顕彰碑が建立されている。
- (8) 前掲、59頁。石井均「大東亜建設審議会と戦争初期の対南方教育政策」、『軍事史学』111号 1992年。
- (9) 前掲、59~60頁。
- (10) 前掲、79頁。
- (11) 『中外日報』1942年8月20日号。
- (12) 「民族対策参考資料」(明石陽至編『渡辺渡少将軍政(マラヤ・シンガポール)関係史・資料』第4巻 龍溪書舎、1998年、240頁。この資料は渡辺の下部組織である総務科が作成したもので、渡辺の民族対策の考え方がよく反映されている。明石陽至による「解説」参照)
- (13) 前掲、241~242頁。
- (14) 松永典子「日本軍政下のマラヤ(1941~45年)における日本語教育の性格 —マラヤ軍政監部・ジャワ軍政監部編纂の日本語教科書の比較から— 日本語教育学会『日本語教育』113号、2002年 56頁
- (15) 「富軍政年報」(明石陽至編『渡辺渡少将軍政(マラヤ・シンガポール)関係史・資料』第5巻 龍

戦前のシンガポールにおける日本語学校について

- 溪書舎、1998年、124～125頁。134頁。
- (16) 『海外開教要覧』(西本願寺海外開教要覧刊行委員会、1974年)
 - (17) 『本願寺史』第三卷(本願寺史料研究所 1969年、423頁) 拙稿「大谷光瑞とウラジオストク」(浦潮本願寺記念碑を建立する会 『浦潮本願寺記念誌』2001年)
 - (18) 『高輪同窓倶楽部名簿』(高輪同窓倶楽部 1927年) この高輪同窓倶楽部というのは、高輪中学、高輪商業の同窓会が合併して出来た組織である。本願寺文学寮が廃され、新たに東京に高輪仏教中学、高輪仏教大学が設立されたが、その流れを受け継ぐ学校として、高輪中学、高輪商業などがある。
 - (19) 前掲、『海外開教要覧』240頁。
 - (20) 『教海一瀾』96号 1901(明治34)年5月15日。
 - (21) 『中外日報』1942年7月28日号。
 - (22) 『中外日報』1942年8月27日号。
 - (23) 『本願寺新報』966号 1942(昭和17)年6月25日。
 - (24) 小島勝「戦前アジア地域における本願寺派開教使の日本語教育」(『佛教文化研究所紀要』第26集 龍谷大学佛教文化研究所 1987年、32頁。)
 - (25) 『昭南時代 新加坡陥落三年零八ヶ月』展覧図集(新加坡国家档案馆 157頁。奥付に日時記載はないが、英語版「The Shonan Years, Singapore and Japan rule 42～45」は2005年の発行である。おそらく英語版を中国語に翻訳したと思われる)。
 - (26) 『読売新聞』1942年2月24日号。
 - (27) 『朝日新聞』1942年11月25、26日号。なお1942年10月30日付け『朝日新聞』には昭南日本語学校卒業式の様子を伝えている。「現地青年子女に正しい日本語を教へる昭南日本學院は二十八日午前十一時から第二期生徒約二百名の卒業式を舉行した。同學院はこれを機に軍宣傳班の手から軍教監部文教課に移管され、昭南国民學校と改稱して、組織を擴充、日本語教育の最高殿堂となる」。
 - (28) 『読売新聞』1942年12月16日、17日、18日号。
 - (29) 『朝日新聞』1942年8月19日号。

付記① 昨年12月に初めてシンガポールに行く機会を得た。中国系、マレー系、インド系或いはその他の人々が多く共存しながら生活している姿に一種の違和感を覚えると同時に、国際化ということ併せて考えた。共通語としての英語があり、第一言語として中国語やマレー語などが存在する。そうした環境の中で自分の持っているアイデンティティはどこにあるのか。自分のルーツはどこなのか。という問題を考えさせられた。戦前シンガポールに住んだ日本人たちも同じような考えの下で暮らしていたのではないだろうか。

同行していただいた昨年までの同僚郭俊海先生(現九州大学)が国立公文書館で『昭南新聞』に目を通し、一生懸命資料を読み込んでいる姿に少なからず感動を覚え、本願寺が当地で日本語学校を経営していることを知り、今回この論考を上梓するに至ったわけである。門外漢の私を常に励ましてくれた郭先生に感謝したい。

付記② 脱稿後、池田浩士編『大東亜共栄圏の文化建設』(人文書院)という興味深い本があるのを知った。早速買い求めてみると、渡辺洋介氏の「シンガポールにおける皇民化教育の実相－日本語学校と華語学校の比較を中心」という論考があり、昭南日本語学校のことを、学校の成立から授業科目あるいは卒業生への聞き取り等、実に詳しく書かれてあった。参照できなかったが、いい勉強になった。